

## アラブの空に見る

大野元裕

航空自衛隊がイラクに派遣されて二年半。十年以上もゴラン高原において、時に深い霧の中から陸上自衛隊が見てきたアラブの空、九一年、灼熱のペルシャ湾の海上で機雷を見張りながら海上自衛隊員が時に見上げた群青の空、そして航空自衛隊員は今、クウェートやタリルにおいてどんな空を見ているのだろうか。

アラブ人が見た空の中で、我々の多くが知る空は、ロマンティックな夜の空かもしれない。月の砂漠の歌がイメージさせる夜空は、とめどない空想へと我々を誘う。羊を追って放牧をする羊飼いたちが見た夜空には多くの星が散らばっていた。悠久の時に遊ぶあの時の夜空は、満天の星の中に流れ星がこぼれる現代のアラブの夜空と同じなのであろう。砂漠においてらくだ交易にたずさわる人々は、何も目印のない砂漠の中で、星を目当てに旅を続けた。ペルシャ湾の水先案内人たちも、星を頼りに航海をしたと言われている。アルタイル、ベガ、アルデバラン。アラビア語源の星の名前は、アラブ人たちが残した足跡である。

しかしながら、アラブ人たちは、この空がロマンティックなものに留まることを許さず、人間の英知の下に屈服させようとした。それは九世紀終わり大空を滑走したイブン・フィルナースの世界最初の飛行機に留まることはなかった。アラブのカリフや諸王たちは、バグダードやダマスカスを始めとする多くの地域に天文台を建設し、天文学的・数学的才能を存分に発揮させた。赤道、黄道、天文図のみならず、一日の正確な時間、時計や緯度、世界中どこからでもメッカの方向を特定する方法と道具などのアラブのさまざまな英知は、海を越えてより低い文化圏に伝えられた。それでも、地球が平らで、宇宙の中心にあると信じていたヨーロッパ人を納得させるまでには、数百年を要したのであった。

彼らの知識は図書館に集められ、後代の研究の糧とされた。九世紀のバグダードでは、百を越える図書館が建てられ、また、カイロのカリフ・アジーズは、百六十万冊の蔵書を有していた。アラビア文化とはまさに、必要に応じて自然を自らの僕べにするための学問の集積でもあった。それは、空に届かんと建設されたバーベルの塔を神に破壊された彼らの怨念であったのだろうか。否、ロマンティズムにアラブの文明を還元することは、彼らに対する偏見を再び深めるだけであろう。

アラブの空は時にロマンティックであるが、灼熱の太陽やクウェートの砂嵐（アッジャージュ）に見られるとおり、時に過酷である。しかしながらその遠くにある真実と有用性を見る目こそ、アラブ人の本質かもしれない。にもかかわらず、彼らが現代のイラクの空に見ているのは、果たしてなんであろうか。かつてバグダードで小中学生の展覧会の絵を見たとき、強く印象に残ったのは、多くの絵の空に描かれたスカッド・ミサイルやミグ戦闘機であった。彼らの思いはイランとの八年にわたる戦争にあり、空には戦いと血のにおいを見ていたのかもしれない。イラクの空に軍用機や迫撃砲が飛ぶことを想像せずすむ

日は、まだ遠いのであろうか。

日本の対イラク支援が、あたかも陸上自衛隊の撤退により終わったかのような報道がある中で、イラクの人々は「切れ目のない支援」を切望している。我々がイラクの子供たちに見せることができる上空の光景は、希望ある将来であらうか。そして、イラク人の空は、いつかイラク人の手に戻り、日本や世界の空と繋がっていることを実感する日が来るのであろうか。